10月23日（日）第878号
2022年（令和4年）
発行所
松戸よみうり新聞社
松戸市和名ヶ谷723（〒270-2232）
電話（047）392-3300
FAX（047）392-3288

松戸よみうり
THE MATSUDO YOMIURI

お子様に読む習慣を
読売KoDoMo新聞 読売中高生新聞
お申し込みは最寄りの読売新聞販売店へ

7年ぶり松戸神社「神幸祭」

「宮神輿」修復、200人が担ぎ練り歩く

松戸総鎮守・松戸神社の「松戸の大まつり・神幸祭（しんこうさい）」が16日、松戸駅西口で7年ぶりに行われた。伝統の「四神」を繰り出して古式装束に威儀物を掲げた神社神輿一行総勢400人が、松戸駅西口の旧松戸宿氏子町会を約2・3キロにわたり巡行した。

【戸田　照朗】

「神幸祭」は当初2020年10月に予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から延期されていた。今回は松戸駅西口方面のみの巡行。後半のキテミテマツドから松戸神社までは、2019年に修復し輝きを取り戻した「宮神輿」を各自治会・町会の200人以上が順に担いで練り歩いた。

発輿祭（はつよさい）を執り行った後、松戸神社を御発輿（ごはつよ）し、宮前町、角町、下横町、三丁目、二丁目、本町、松戸駅西口とまわり、キテミテマツドで駐輿式（ちゅうよしき）を行い、その後はそれまで台車に載せ牽いていた宮神輿を担いで巡行し、松戸神社に御着輿（ごちゃくよ）した。

松戸神社神幸祭は、宝暦年間（1751年～1763年）の祭具が今に残され、約260年前から行われていた祭り。「松戸の大まつり」と親しまれた江戸時代には、近郷四里（約16キロ）四方から見物客が集まり、松戸宿は大いに賑わったと伝えられている。

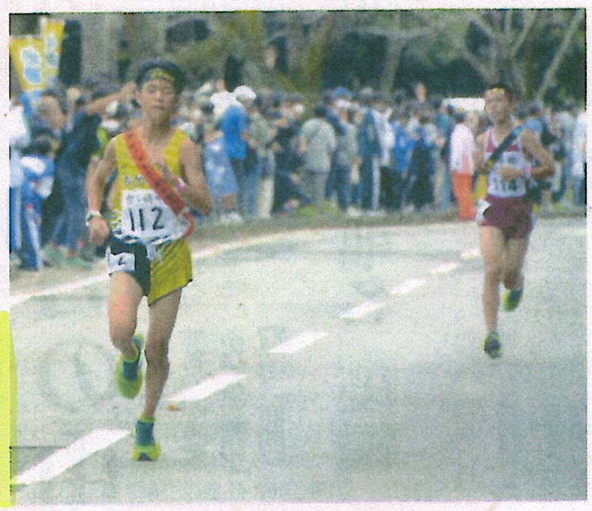
昭和初期の斎行を最後に60年余り途絶えていたが、1989年（平成元年）に神社の蔵から木像の四神が偶然発見されたことから古式に則り継承すべく復活し、今回で6回目の斎行となった。

四神とは東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武からなる天の四方を守護するという霊獣のこと。行列に木像の四神を伴うという松戸神社の「神幸祭」は、今では全国的にも珍しくなっていると言われている。

神幸祭の行列は神社提灯を先頭に、神幸旗、鼻高面、四神、月像旗、日像旗と続き、さらに御盾、御鉾に守られた宮神輿、巫女、各町代表供奉員、五色旗などが巡行した。

松戸神社前を巡行する「四神」

修復が終わり、久しぶりに人によって担がれた「宮神輿」


10区、古ヶ崎・城尾太陽選手（左）、河原塚・加藤大雅選手

3年ぶり東葛中学駅伝

古ヶ崎7位、河原塚9位

古ヶ崎「県駅伝で優勝目指す」

第74回東葛飾地方中学校駅伝競走大会（東葛飾地区教育委員会連絡協議会、毎日新聞社ほか主催）が15日、3年ぶりに開催され、酒井根（柏市）が1時間41分08秒で優勝。2位に久寺家（我孫子市）、3位に常盤松（流山市）が入った。松戸勢では、7位に古ヶ崎、9位に河原塚が入賞した。

レースは松戸市民劇場前をスタート、野田市総合公園陸上競技場をゴールとする10区間、31・9キロで行われた。

古ヶ崎は終始上位でレースを展開。4区を走った吉村莉一郎選手は2位にまで押し上げた。

キャプテンでアンカーを務めた城尾太陽選手は、「前半から目標のペースで行けて、気持ちよく走れた。県新人駅伝で優勝しているので、来月5日の県駅伝では、やっぱり古ヶ崎はすごいなと思われるような走りで、引き離して優勝したい。個人としては、区間3位以内を目指して頑張りたい」と話した。

田中輝充監督は「人数の少ない学校ですが、選手たちはよく頑張って、入賞できたと思います。来月5日は全国大会出場をかけて酒井根ともう一度勝負したい。これからの3週間で、中学生は劇的に変わるので、いくらでもチャンスはあると思う。しっかり気を引き締めて、全力で優勝をつかみにいきたい」と話した。

河原塚は1区で47位と少し出遅れたものの、区間ごとに着実に順位を上げて、入賞を果たした。

キャプテンで5区を走った横山青昊選手は、「3年前の前回は69位。河原塚中はずっと入賞できていなかったので、河中の歴史を塗り替えることができてうれしい。きょうは9位という結果でしたが、県駅伝では上位の8校を抜くというのが、新しい河中の目標です」と話した。

蓑和廣太朗監督は、昨年、常盤平を男女とも全国大会に導き、今年から同校に赴任した。フォームや脚の使い方、身体の使い方を教えることで練習量が少なくてもしっかり走れるようになるという練習方法を確立し、同校でも実践。夏以降、選手が伸びてきたという。「今年の目標は入賞だったので、それが達成できてよかった。すごいエースがいるわけではなく、層が厚いところがこのチームのいいところ。県駅伝は6人なので、少し厳しくなるかもしれないが、東葛駅伝入賞で弾みがついたので、県駅伝でも8番以内を目指して頑張りたい」と話した。

【戸田　照朗】

少年のころ、宗教は人類にとって無いほうが良いのでは、と思っていた。「天国も、地獄も、国も、宗教も無いと想像してごらん。みんなが平和に暮らしている」と歌うジョン・レノンの「イマジン」に共感した▼イランで風紀警察に髪の露出を注意され拘束された女性が死亡し、世界中で女性の自由を訴える運動が広がっていることや、終わらない旧統一教会による被害と政治家との癒着を見るにつけ、今でもモヤモヤする▼「サピエンス全史」（ユヴァル・ノア・ハラリ）に面白い記述があった▼ネアンデルタール人は、知力体力ともに私たちサピエンスより優れ、それゆえに家族単位で生活することができたが、私たちの祖先は、非力ゆえに集団を作って生活した。ネアンデルタール人の石器などの道具は初期からほとんど変わらなかったが、サピエンスの道具は時を追うごとに洗練されていった▼家族単位では知識や技術が継承されにくい。集団の中では共有され次世代に引き継がれていく▼集団を作る上で大きな役割を果たしたのが宗教だった。同じものを信じる人たちの結束は強い。結果、ネアンデルタール人は滅び、私たちは生き延びて文明を築いた▼人類から宗教を切り離すことはできないのかもしれないと気がついて、がく然とした。

▲松戸よみうりホームページへ

次号は11月27日発行
https://www.matsudo417.com/matsuyomi/
yomiuri@matsuyomi.co.jp